

【海外学会報告】

2016年度 第18回韓国ケベック学会 参加報告 18^e colloque de l'ACEQ (Association Coréenne d'Études Québécoises) Le samedi 12 novembre 2016, Université Sungkyunkwan, Séoul

第18回韓国ケベック学会は、昨年11月12日(土)、アジア最古とも言われるソウル市内のソングングァン(成均館)大学にて開催された。折しも、パク・クネ大統領をめぐる疑惑が韓国社会に大きなうねりのように広がりつつあり、大会のあった週の金曜日には20万人、さらに大会当日には80万人余のデモ参加者を集めるまでに膨れあがるなかでの開催となった。

第18回大会のメイン・テーマとなったのは、ケベック映画界の超新星ともいえるべきグザヴィエ・ドラン(Xavier DOLAN)。同年のカヌ映画祭では長編第6作となる『たかが世界の終わり』(Juste la fin du monde)がグランプリを獲得するなど、世界が注目する若きシネアストではあるが、まだその作品についての研究は、いままさに端緒が開かれようとしているばかりであり、きわめて挑戦的なものでもある。

また、本大会に付随するかたちで、11日(金)より週末の3日間にわたってドラン作品のレトロスペクティヴ上映がソウル市内のアート系映画マルチコンプレックス館「シネマテーク」において、ACEQとケベック州政府ソウル支部の共催によって開催されており、グザヴィエ・ドラン研究の先陣を切る勢いを感じさせた。しかも、プレミア上映となった『たかが世界の終わり』は満席の観客を集め、韓国でのドラン作品に対する注目度の高さに目を瞠らされるばかり。

今回のテーマを決定されたのは、AJEQの大会でも発表されたことがある、ソングングァン大学のパク・ヒテ(PARK Heui-Tae)先生だが、大会当日の発表に加えてシネマテークでのレトロスペクティヴ上映後のティーチンに際しても、コリョ(高麗)大学のイ・ナラ(LEE Nara)先生とともに登壇されるなど八面六臂の活躍。また、韓国は初めてという筆者の案内役をしていただいたのに加えて、韓国の映画事情もご紹介いただき、貴重な経験をさせていただいた。

そして12日、朝からパク・クネ大統領の退陣を求める大規模なデモが朝から行われ、ソウル市内の交通が麻痺するなか、その日の午後より第18回大会は開催された。

今回、韓国国外からの参加は筆者のみ。騒然とした国内状況に加えて、映画がメイン・テーマということで当日の参加者は30名程度にとどまった。13時、ハン・ヨンテク(HAN Yong-Taek)会長による開会の辞によって開幕。大会の構成

は、前半と後半の2部に分かれ、前半の「セッション1」は、「Modernité du Québec et Xavier Dolan」と題され、主にドラン映画の背景となるケベックの社会と文化に焦点を合わせたもので、後半の「セッション2」ではドラン映画を細かく分析してゆく発表が中心となった。筆者の発表は、日本におけるケベック映画の受容について追ったもので、前半の「セッション1」に包括された。ACEQの前会長であるソングンガン大学のイ・ジソン(LEE Ji-Soon)先生による最初の発表は、“La modernité dans *Le Survenant* de Germaine Guèvremont”との表題が示す通りに、ケベック発のテレビドラマ“*Le Survenant*”について、原作とともに当時(1950年代後半)のケベック社会について分析されたもの。続く、スンミョン(淑明)女子大学のイ・カヤ(LEE Kaya)先生による“Les cultures minoritaires dans les films de Xavier Dolan”では、文字どおりにドラン映画におけるさまざまなマイノリティを考察されたものようだった。そして筆者による「日本におけるケベック映画の受容とグザヴィエ・ドラン現象」という3つの発表が前半部を構成。

休憩を挟んだのちの後半部「セッション2」は、「Études microscopiques des films de Xavier Dolan」と題されている通りにドラン映画の核心を突くふたつの発表で構成。まず、前日のレトロスペクティブ上映後のティーチンでも登壇されたイ・ナラ先生による発表“L’Image de Mater Dolorosa dans les films de Xavier Dolan”において、ジョルジュ・ディディエ＝ユベルマンのフラ・アンジェリコ論を手がかりとしてドラン作品に対する図像学的アプローチが試みられ、最後にパク・ヒテ先生が“Approche formelle des films de Xavier Dolan”と題された発表において、ドランとドラン映画をめぐるさまざまな言説を開いて見せたのち、それらの子細に検証した上で覆してゆき、新たな見方を探ろうとされているようだった。

いずれも韓国語による発表であり、詳細な内容までは把握できなかつたのが残念だったが、とはいえ図像によるアプローチであったこともあり幾分かはとらえることができたと思う。ドラン映画をめぐる研究はまだこれからではあるが、今回のACEQの大会が今後のドラン映画研究の指針のひとつとなるであろうことは間違いないだろう。

大会終了後、韓国の伝統料理(唐辛子が広まる以前の辛い料理)のおもてなしをいただき、その場では映画のみならず文学(フランス文学が中心だったが)のことについても話すことができたのがよい思い出となった。

韓国初体験、大規模なデモも初体験であり、まったくもって慌ただしい滞在ではあったが、パク・ヒテ先生はじめハン・ヨンテク会長、イ・ジソン前会長ほか、さまざまな方のお世話になり、充実したものにすることができた。今後のドラン研究、そしてACEQの発展を願うとともに、感謝の言葉を申し添えたい。

(杉原賢彦 立教大学)